初期近代英語における動詞の命題補部についての定量言語学的研究*

Corpus linguistic studies in English Propositional Complementation Patterns in Early Modern English

藤内響子
Kyoko Fujiuchi

[Abstract]

Many studies have revealed a steady and general increase in the use of the gerund in the history of English complementation, while there is a degree of flexibility in the use of both gerunds and infinitives in Modern English. This is one of several historical developments in complement patterns that have come to be known as the Great Complement Shift, a term first used in print by Rhodenburg (2006). Iyeiri (2010) redefined this Great Complement Shift as a combination of two different shifts: (a) the shift from that-clause to to-infinitives, the first complement shift; and (b) the shift from to-infinitives to gerunds, the second complement shift. However, there are not many detailed observations on the systematic evolution of complementation in the history of English as yet. Therefore, this study observed, from a quantitative point of view, the detailed changing patterns of complementation in Early Modern English when the first complement shift is supposed to have been most prominently in progress.

キーワード：初期近代英語、命題補部、大補文推移
Key words: Early Modern English, propositional complementation, the Great Complement Shift

１．はじめに

本稿は、藤内（2016a）(2016b) に続く論文として、当時調査中であった部分を中心に取り扱いながら、調査対象全体のカテゴリーを統合し結果をまとめたものであり、2016 年 4 月 9 日に国際基督教大学で行われた英語史研究会において発表した内容を基に加筆、修正を行ったものである。調査対象であるコーパス、および調査の手段は先行論文と同様であるため、詳しくは藤内（2016a）(2016b)をご参照願いたい。

現代英語において to 不定詞や動名詞をその補部として従える動詞には、いろいろ興味深い性質が観察される。to 不定詞、動名詞どちらか一方の形の補部しか目的語にすることが出来ない動詞がある一方で、動名詞も to 不定詞も同じように従えることが出来る動詞も存在するし、また、try や forget のように目的語が動名詞の場合と to 不定詞の場合とでは意味が異なるものもある。教育参考書等にみられる、このような文法事象の説明に共通しているのは、to 不定詞の一部を構成している前置詞 to の意味に注目し、動名詞との意味の差を説明しようとしていることである。しかしながら、動名詞補部の、時と場合に応じたさまざまな意味的変容にはこのような説明だけでは納得しがたいところがある。そこで本研究においては、1500 年以降、数百年にわたって起こり現代にまで続く「大補文推移」[1] の現象も考え合わせながら、定量言語学的アプローチを用いて、特に to 不定詞と動名詞および that 節をはじめとする定形節が動詞の命題補部として歴史的にどのような競合関係にあったのか、現代英語における性質を基にした 4 つのカテゴリー毎に調べ、さらにその結果を考慮したうえで、それによって現代英語における動詞の構造や性質を再分析することを目的としている。最終的には近代英語全般にわたる調査を行う予定であるが、今回は、先ず 1500 年から 1710 年までの初期近代英語 210 年間のコーパスを用いて調査を行った。

調査した 4 カテゴリーは次のとおりである。

カテゴリー1 は、You should avoid *eating* just

before you go to bed.（寝る直前に食べるのは、避けるべきだ。）という例にみられるように、動名詞を目的語としてとるが to 不定詞を目的語にすることは出来ない動詞 [2)]、

カテゴリー2 は、I don't care *to have* coffee after dinner.（夕食後にコーヒーを飲みたいとは思わない。）という例にみられるように、to 不定詞を目的語としてとるが動名詞を目的語にすることは出来ない動詞 [3)]、

カテゴリー3 は、

a. I'll never forget *meeting* him.（私は、彼に会ったことを決して忘れない。）

b. Don't forget *to meet* him.（彼に会うのを忘れないでね。）

という例にみられるように、目的語が動名詞の場合と to 不定詞の場合とでは意味が異なる動詞 [4)]、

カテゴリー4 は、She began *to run*/ *running*.（彼女は走り出した。）という例にみられるように、動名詞、to 不定詞の両方を目的語としてとることができる動詞 [5)]である。

2. カテゴリーごとの分析

調査結果をカテゴリーごとに分けて考えながら、以下に分析を試みてみたい。藤内（2016a）においてはカテゴリー4、藤内(2016b)においてはカテゴリー１の調査結果をそれぞれ考察済みであるので、本稿においては残りのカテゴリー２、３を中心に取り扱い、カテゴリー１、４については先行論文を参照しながら、カテゴリー全体を見ていくことにする。

2.1 カテゴリー1

表 1 はカテゴリー１の調査結果全体をまとめたものである。

それぞれ、1500 年から 1710 年の期間を 50 年ごとに 4 つに分け、Period1 から Period4 として、表にまとめた。Period1 は 1500～1550 年、Period2 は 1551～1600 年、Period3 は 1601～1650 年、Period4 は 1651～1710 年に対応している。一番左端はそれぞれの時代が含んでいるコーパスの総数である。

表 1

Corpora	C1	不定詞		動名詞		節		計
111	Period1	8	21.62%	1	2.70%	28	75.68%	37
99	Period2	22	19.30%	8	7.02%	84	73.68%	114
98	Period3	3	13.04%	4	17.39%	16	69.57%	23
139	Period4	6	6.12%	10	10.20%	82	83.67%	98
447	Sum	39	14.34%	23	8.46%	210	77.21%	272

上述したように、このカテゴリーについては、藤内(2016b)が既に論じている。表 1 は、その当時調査が終了していた 14 の動詞に更に 12 の動詞の調査結果を加え全体像をまとめたもので、合計 26 動詞を調査した結果であるため数値が変わっている部分があるが、結果的に以前のものと大きく異なるような傾向はみられなかった。結果をまとめると次のようになる。

英語における complement shift とは、歴史的に見れば動名詞補部が勢力を確立していく過程であると考えることが出来るのであるから、カテゴリー1 の「動名詞を目的語としてとるが to 不定詞を目的語にすることは出来ない動詞」は、最も早く shift が完成に近づいた類の動詞である可能性があり、その場合、「次第に不定詞補部が定形節補部を凌駕していく」典型的な the first complement shift の様子が観察され、また、「to 不定詞から動名詞への移行」である the second complement shift が起きる以前とされる初期近代英語においても、既に動名詞補部の躍進が顕著に確認できるかもしれないという予測が成り立つ。しかしながら、表 1 をみるとその予測は裏切られ、that 節に代表される定形節補部は、どの時代においても全体のほぼ七割以上をコンスタントに占めている。むしろ時代を下

るにつれてその割合を増しており、Period4 ではそれまでの時代より一気に 10%以上増加して全体の約 84%を占めるに至っている。一方で、to 不定詞補部は Period1 の約 22%から加速度的に減少の一途を辿り、Period4 では全体の 6%ほどを占めるに過ぎないところにまでその割合を減少させている。したがって、この 2 種類の補部を比較する限り、明らかに the first complement shift に逆行した shift が生じているといわざるを得ない。だが、次に to 不定詞補部と動名詞補部の関係についてみてみると、to 不定詞補部が初期近代英語全体で 39 例であるのに対して、動名詞補部は合計で 23 例となっており、to 不定詞の方が多少数では勝っているとはいえ、動名詞補部もそこまで遜色のない数字である。しかも先ほど述べたように、to 不定詞補部は加速度的に減少の一途を辿っていくのであるが、逆に動名詞補部は次第に勢いを増していく様子が伺える。具体的には period1 では、to 不定詞 8 例に対して、動名詞 1 例、Period2 では、to 不定詞 22 例に対して、動名詞 8 例、Period3 以降では形勢が逆転し、to 不定詞 3 例に対して、動名詞 4 例、Period4 では、to 不定詞 6 例に対して、動名詞は 10 例となっている。考えようによっては、このカテゴリーの動詞においては、近代英語後期に特徴的に表れるという the second complement shift が既に 1600 年頃から始まっていると言えるのかもしれない。

表 2 は表 1 を更に構造別に分類したものである。

表 2

C1		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	8	0	0	0	0	0	0	0	8
99	Period 2	20	0	1	1	0	0	0	0	22
98	Period 3	2	1	0	0	0	0	0	0	3
139	Period 4	5	0	0	0	0	0	0	1	6
447	Sum	35	1	1	1	0	0	0	1	39
		無標	無標 + of	有標	有標 + of	主語付き	前置詞先行	複合形		
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	1	0	0	0	0	0	0		1
99	Period2	1	2	2	2	0	1	0		8
98	Period3	1	0	0	1	2	0	0		4
139	Period4	4	0	0	2	1	1	2		10
447	Sum	7	2	2	5	3	2	2		23

		無標	接触節	関係節	間接疑問文					
Clause Corpora	**Patterns**	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	23	2	0	3					28
99	Period2	70	3	1	10					84
98	Period3	5	5	2	4					16
139	Period4	36	21	4	21					82
447	Sum	134	31	7	38					210

より詳細に、構造別にみると次のようなことがわかる。to 不定詞補部においては完了形や受動態といった複合形の例が比較的早期の Period2 に 1 例ずつ確認できるものの、それ以降の発達が全くみられず、単純な to 不定詞の用例も減少していることがわかる。一方、動名詞の方は the を伴わない、より動詞性を持った形が少しずつ増加し、受動態の用例が Period4 になって 2 例現れている。このように、動名詞がそれ自身の動詞的性質をより一層獲得しながら、同時に動詞の命題補部としても勢力を拡大していく様子を伺うことができる。定形節では時代を下るごとに that を伴わない型や what を使用した関係節、間接疑問文の使用に増加がみられ、使用頻度と構造の複雑化の両方に関して発達していく状況がみてとれる。特に Period4 で関係節や間接疑問文が発達していることから、この後の後期近代英語においても、更なる発達が見られるであろうことが予測できる状態である。

2.2 カテゴリー2

次に、カテゴリー2 の動詞についてみてみる。表 3 はカテゴリー2 の調査結果全体をまとめたものである

表 3

Corpora	C2	不定詞		動名詞		節		計
111	Period 1	73	62.39%	0	0.00%	44	37.61%	117
99	Period 2	135	56.02%	2	0.83%	104	43.15%	241
98	Period 3	95	66.43%	4	2.80%	44	30.77%	143
139	Period 4	178	52.51%	9	2.65%	152	44.84%	339
447	Sum	481	57.26%	15	1.79%	344	40.95%	840

このカテゴリーの動詞は、「to 不定詞を目的語としてとるが動名詞を目的語にすることは出来ない動詞」である。表をみてみると、1500 年前後の早い時期から全ての時代において、to 不定詞補部が最も優勢な補部であり、コンスタントに全体の 5 割から 6 割を占めていることがわかる。それに対して定形節の方もコンスタントに 3 割から 4 割を占めており、時代ごとの相違があまり感じられない。一方、動名詞補部は 15 例存在するものの、最初の 50 年間では出現数はゼロ、その後も to 不定詞補部の数十分の一程度しか存在せず、カテゴリー 1 の動詞とはだいぶ様相が異なっている。割合的にも、period3 以降は少しずつ増加の傾向を示しているが、せいぜい 2%台に留まっている。

次に構造別の表 4 をみてみよう。

表 4

C2		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	66	0	0	7	0	0	0	0	73
99	Period 2	127	0	1	7	0	0	0	0	135
98	Period 3	84	0	0	10	0	0	0	1	95
139	Period 4	154	0	3	18	0	0	1	2	178
447	Sum	430	0	4	42	0	0	1	3	480
		無標	無標 + of	有標	有標 + of	主語付き	前置詞先行	複合形		
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	0	0	0	0	0	0	0		0
99	Period2	0	1	0	0	0	1	0		2
98	Period3	1	0	0	1	0	2	0		4
139	Period4	1	0	0	1	0	7	0		9
447	Sum	2	1	0	2	0	10	0		15
		無標	接触節	関係節	間接疑問文					
Clause Corpora	**Patterns**	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	31	11	0	2					44
99	Period2	48	38	1	17					104
98	Period3	22	15	0	7					44
139	Period4	54	82	4	12					152
447	Sum	155	146	5	38					344

to 不定詞補部は、数においてのみならず、かなり早い時期から受動態や完了形といった複合的な不定詞の補部を発達させてもいることがわかる。特に受動態が時代を経るごとに増加の傾向をみせ、最終的には 481 例中 42 例と、不定詞の全用例の 9%近くを占めている。この種の動詞は、相当に早い時期に最初のシフトを終え、十分に不定詞補部を発達させることが出来ているようである。一方で､動名詞補部は数も少なく複合形もみられない。加えて、動詞によって大きな偏りがあり、全 15 例のうち動詞 fail だけで前置詞付きの用例を 9 例もとっているため、この fail を除くと、このカテゴリーにおける動名詞補部はさらに未発達な状況であることになる。定形節は Period4 で－that の用例が＋that を逆転し、関係節の使用に増加がみられ、カテゴリー 1 の動詞ほどではないが、間接疑問文も発達させている。後続する時代を更に調査しなければ断定は出来ないが、早期に最初のシフトを体験し、to 不定詞補部を発達させる時間が十分にあったために、後に動名詞補部が発達する時代を迎えても、それをあまり必要とはしないまま現在に至るのかもしれない。

2.3 カテゴリー3

次はカテゴリー3 の動詞をみてみる。このカテゴリーの動詞は retrospective verbs と呼ばれ、to 不定詞補部と動名詞補部の間で明確に意味が異なる興味深い発達を遂げてきた種類の動詞である。

表 5 は、用例が存在しなかった regret を除く forget、remember、try の調査結果をまとめた全体表である。

表 5

Corpora	C3	不定詞		動名詞		節		計
111	Period1	2	11.11%	0	0.00%	16	88.89%	18
99	Period2	8	12.12%	0	0.00%	59	88.05%	67
98	Period3	6	20.69%	2	6.90%	21	72.41%	29
139	Period4	14	11.47%	1	0.83%	107	88.43%	122
447	Sum	30	12.71%	3	1.28%	203	86.01%	236

圧倒的に多いのが定形節補部を取る用例である。to 不定詞補部は、時代を経るごとに増加傾向を見せてはいるものの、全用例を合わせても全体の約 12.71％程度でしかない。動名詞補部に至っては Period3 になって初めて現れて以降、Perod4 と合わせても僅か 3 例しか存在しない。

次にカテゴリー3 の構造別の表である表 6 をみてみよう。

表 6

C3		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	1	0	0	1	0	0	0	0	2
99	Period 2	8	0	0	0	0	0	0	0	8
98	Period 3	6	0	0	0	0	0	0	0	6
139	Period 4	11	0	1	0	0	0	0	2	14
447	Sum	26	0	1	1	0	0	0	2	30
		無標	無標 + of	有標	有標 + of	主語付き	前置詞先行	複合形		
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	0	0	0	0	0	0	0		0
99	Period2	0	0	0	0	0	0	0		0
98	Period3	0	0	0	0	2	0	0		2
139	Period4	0	0	0	0	1	0	0		1
447	Sum	0	0	0	0	3	0	0		3
		無標	接触節	関係節	間接疑問文					

Clause Corpora	**Patterns**	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	6	4	0	6					16
99	Period2	25	8	0	26					59
98	Period3	8	3	1	9					21
139	Period4	37	33	2	35					107
447	Sum	76	48	3	76					203

興味深いことに、Period1 という早い時期に受動態の構造を持つ to 不定詞補部の用例が存在している。僅か 1 例ずつではあるものの、Period4 においては完了形の用例も見ることが出来る。それに対して、動名詞の用例は、①の文のようなものばかりで、かなり未発達な状態である。

① I hold my life you haue forgot <u>your Dauncing</u>: (MIDDLET-E2-H,1.13)

定形節の用例に目をやると、＋that の節と同数で間接疑問文の節が多いことと、－that の節が時代を経るごとに増えてきていることが読み取れる。

更に、このカテゴリーが持つ特殊な性質を考えて、それぞれの動詞をより詳しくみてみたい。表 7 は動詞 forget の表である。

表 7

forget		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
99	Period 2	4	0	0	0	0	0	0	0	4
98	Period 3	2	0	0	0	0	0	0	0	2
139	Period 4	6	0	0	0	0	0	0	0	6
447	Sum	12	0	0	0	0	0	0	0	12
		無標	無標 + of	有標	有標 + of	主語付き	前置詞先行	複合形		
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	0	0	0	0	0	0	0		0
99	Period2	0	0	0	0	0	0	0		0
98	Period3	0	0	0	0	2	0	0		2
139	Period4	0	0	0	0	0	0	0		0
447	Sum	0	0	0	0	2	0	0		2
		無標	接触節	関係節	間接疑問文					

Clause / Corpora	Patterns	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	0	0	0	0					0
99	Period2	4	0	0	3					7
98	Period3	0	0	0	0					0
139	Period4	2	0	1	2					5
447	Sum	6	0	1	5					12

forget は、完了形と共に用いられることが多く、全 26 例のうち、実に 20 例が完了形と共に用いられている。現在完了形が 13 例、過去完了形が 7 例である。当時は現在完了や過去完了も発達過程であったことから、時制の使用に混乱が生じているようで、過去完了形に関して言えば、次の②のように、現在で考えれば過去形で十分であって、本来あえて過去完了にする必要のない例が殆どである。

②I <u>had almost forgot to desire</u> the to returne my thanks to Capt.
(RHADDSR-1670-E3-P2,14.120)

命題補部の時制が主節よりも過去であることを示す場合には、

③ What woldest thou say yf that a man had vtterly lost his sight and also <u>hadde forgotten</u> that euer <u>he sawe</u>, and yet dyd thynke that he lacked nothing of the perfection of a man
(BOETHCO-E1-H,102.714)

④And <u>hast</u> thou <u>forgotten</u> howe that Paulus a consull of Rome, <u>wepte</u> for the
myserye of the kynge of Persyens, whom he had taken prysoner and captyue.
(BOETHCO-E1-P1,33.273)

のように、現在完了・過去完了形を問わず、過去形が用いられている。このような混乱の下で、「潜在的に未来志向を持つ to 不定詞やその複合形」以外の「動名詞」が主節の動詞よりも過去を示す手段として選択された可能性は否定できないかもしれない。もちろん議論を進めるには、さらに後期近代英語の状況を調べることが必要である。

表 8 は動詞 remember の表である。

表 8

remember		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive / Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	1	0	0	1	0	0	0	0	2
99	Period 2	2	0	0	0	0	0	0	0	2
98	Period 3	1	0	0	0	0	0	0	0	1
139	Period 4	0	0	1	0	0	0	0	1	2
447	Sum	4	0	1	1	0	0	0	1	7

		無標	無標 + of	有標	有標 + of	主語付き	前置詞先行	複合形		
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	0	0	0	0	0	0	0		0
99	Period2	0	0	0	0	0	0	0		0
98	Period3	0	0	0	0	0	0	0		0
139	Period4	0	0	0	0	1	0	0		1
447	Sum	0	0	0	0	1	0	0		1
		無標	接触節	関係節	間接疑問文					
Clause Corpora	**Patterns**	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	6	4	0	6					16
99	Period2	21	8	0	16					45
98	Period3	8	3	1	4					16
139	Period4	35	33	1	17					86
447	Sum	70	48	2	43					163

動詞 remember は用例数が最も多く、全 236 例のうち 171 例はこの remember のものである。上述した、このカテゴリーに各一例ずつ存在する to 不定詞の完了形や受動態の用例もこの remember の用例に含まれている。forget とは異なり、現在形や未来形で表わされることが殆どであるが、⑤の例文一例だけが、forget の場合と同様の過去完了形を用いた同じ構造の用例になっている。

⑤ And I had not remember'd it, but that it was upon that Holiday.
(OATES-E3-H,4,74.C2.191)

最後は動詞 try についてである。表 9 をみてみよう。

表 9

try		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
99	Period 2	2	0	0	0	0	0	0	0	2
98	Period 3	3	0	0	0	0	0	0	0	3
139	Period 4	5	0	0	0	0	0	0	1	6
447	Sum	10	0	0	0	0	0	0	1	11
		無標	無標	有標	有標	主語	前置詞	複合形		

			+ of		+ of	付き	先行			
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	0	0	0	0	0	0	0		0
99	Period2	0	0	0	0	0	0	0		0
98	Period3	0	0	0	0	0	0	0		0
139	Period4	0	0	0	0	0	0	0		0
447	Sum	0	0	0	0	0	0	0		0
		無標	接触節	関係節	間接疑問文					
Clause Corpora	**Patterns**	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	0	0	0	0					0
99	Period2	0	0	0	7					7
98	Period3	0	0	0	5					5
139	Period4	0	0	0	16					16
447	Sum	0	0	0	28					28

try には、３つの動詞の中で唯一動名詞の用例が存在しない。現代英語において try が動名詞をとる場合は、「～しようとする」ではなく「試しに～をやってみた」となるため、try は過去形で用いられることになるが、調査結果の 39 例を確認すると、過去形や完了形の try は僅か 5 例である。現在でも try の補部には未達成の意が含意されるものが来ることが多いが、try と言う動詞自体がもともと「これから為されなければならない行為」をあらわすことが改めて示されている。ここでもその 5 例のうち 4 例は、⑥の例文のように、

⑥ I tried to weigh them in my arms,
(PEPYS-E3-P2,8,326.149)

「～しようとした」の意味で用いられており、現在動名詞補部と共に用いられる「試しにやってみた」の意味ではない。しかし残りの 1 例は、try が過去完了形で用いられているが、意味的には「試しにやってみた」となるものである。⑦の用例がそれである。

⑦ and she herself had tryed if the small pox is to be catched,
(ANHATTON-E3-H,2,212.9)

⑦は、try が節を補部として取っており、意味的には「天然痘が移るのかどうか試しにやってみた」という例であるが、時制をみると過去完了形に現在形が続いている。天然痘と言う病気の一般的性質ということで、不変の真理を示す現在形であると考えてよいかもしれないが、通常はあまり見られないタイプである。この例文だけは、意味的に考えれば try が動名詞補部を取ることが出来る可能性を秘めている。しかしながら、try と補部の主語が異なり、「～かどうか」の if 節をとっている上に受身形の動詞が用いられているため、動名詞をこの文の補部とすることは実質上不可能である。この時代以降、近代的、科学的な観念がさらに発達したのち、科学的な実験等によって「試す」という行為の概念が一般的に広がり、過去形の try がもっと多頻度で使用されるようになって初めて、動名詞補部という形が必要になるのかもしれない。

2.4 カテゴリー４

最後にカテゴリー4 を見てみよう。このカテゴリーに属するのは、「目的語が動名詞でも to 不定詞でもどちらでもとれる動詞」である。

表 10

Corpora	C4	不定詞		動名詞		節		計
111	Period 1	61	84.72%	8	11.11%	3	4.16%	72
99	Period 2	123	91.11%	4	2.96%	8	5.92%	135
98	Period 3	106	89.83%	7	5.93%	5	4.23%	118
139	Period 4	224	87.16%	16	6.23%	17	6.61%	257
447	Sum	514	88.31%	35	6.00%	33	6.00%	582

先行論文の一つ、藤内（2016a）において、既にこのカテゴリー4 の調査結果を考察済みであるので、その結果を簡単にまとめる。表 10 はカテゴリー4 の調査結果全体をまとめた表である。表をみると、このカテゴリーにおいては、最初から圧倒的多数を占めているのは to 不定詞補部であり、that 節に代表される定形節補部はどの時代においても全体の 4～6%前後に過ぎないことがわかる。少なくともこの 24 動詞に関しては、the first complement shift は進行中の推移ではなく、初期近代英語以前にほとんど完成してしまっているような印象を受ける。

次に、to 不定詞補部と動名詞補部の関係について見てみると、to 不定詞補部が圧倒的であるのに対して、動名詞補部は初期近代英語を通して全般的に少ない。the second complement shift は起きつつあると言えるかもしれないが、まだまだ萌芽状態であると言わざるを得ず、「近代英語後期に特徴的に表れる」という記述を裏付けているようにも思われる。Period 1 の結果だけはそれ以降の時代の流れとは異なり、一見すると動名詞の使用頻度が他の時代より高くみえるが、to 不定詞補部と動名詞補部の関係で period1 に他の時代の数値とずれが生じるのは、動名詞補部の問題というよりも、to 不定詞補部の用例数が他の時代と比較して少ないからではないかと考えられる。to 不定詞の項を時代ごとにみると判るのだが、時代を経るにつれ、61 から 224 へと Period1 と Period4 の間には用例数で 4 倍近い開きが観察されるのである。つまり、初期近代英語における命題補部の推移においては、補部の競合以外に、「単純な目的語とは異なり、命題をその内部に持つ補文（命題補部）構造の使用そのもの」が、定形、非定形とも一般的に認知され、使用機会を拡大していく過程も含まれているように思われる。

用例をより詳細に、構造別にみてみると、表 11 のようになる。

表 11

C4		不定詞	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞+原形	wh 句付き	
Infinitive Corpora	**Patterns**	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
111	Period 1	59	0	0	2	0	0	0	0	61
99	Period 2	119	1	2	1	0	0	0	0	123
98	Period 3	102	0	2	1	0	0	1	0	106
139	Period 4	202	0	5	16	0	1	0	0	224
447	Sum	482	1	9	20	0	1	1	0	514

		無標	無標 + of	有標	有標 + of	主語 付き	前置詞 先行	複合形		
Gerund Corpora	**Patterns**	- the	-the +of	+ the	+the +of	+ Subj	+ P	+ be		Sum
111	Period1	4	1	0	0	3	0	0		8
99	Period2	1	0	0	0	0	3	0		4
98	Period3	4	2	1	0	0	0	0		7
139	Period4	13	2	1	0	0	0	0		16
447	Sum	22	5	2	0	3	3	0		35
		無標	接触節	関係節	間接 疑問文					
Clause Corpora	**Patterns**	+that	-that	relative	question					Sum
111	Period1	2	0	1	0					3
99	Period2	4	1	1	2					8
98	Period3	3	0	1	1					5
139	Period4	2	7	4	4					17
447	Sum	11	8	7	7					33

表 11 によれば、Period4 の時代を中心に、to 不定詞においては完了形や受動態といった、複合形がその頻度を増し、単純な to 不定詞の用例も増加していることがわかる。動名詞も、複合形はまだ見られないものの、定冠詞を伴わない単独での使用が増加している。また、定形節では that を伴わない型や what を使用した関係節､間接疑問文の使用に増加がみられる。このように、使用頻度と構造の複雑化の両方に関して発達していく状況がみてとれ、この後の後期近代英語においては、更なる発達が見られるであろうことが予測できる状態だと言えるだろう。

3. まとめ

以上、初期近代英語における動詞の命題補部についてみてきた。それぞれのカテゴリー毎にそれぞれの異なる発達の過程を観察することができ、興味深い結果を得ることができた。

カテゴリー1 の動詞は、現在、目的語として動名詞として従え、to 不定詞は取らない動詞となっている。調査した 26 動詞のうち、半分近くの 12 動詞に用例がみられず、この割合は 4 カテゴリー中、特に高いものとなっている。このカテゴリーに関しては 18 世紀以降になるまで命題補部を従える構造自体が未発達であったといえそうである。

命題補部を従える場合は、初期近代英語全般を通じて定形節の用例が 7 割から 8 割を占め圧倒的である。to 不定詞補部と動名詞補部の用例を比較してみると 17 世紀後半から to 不定詞補部が衰退する様子が伺える。したがって、この傾向が進めば、カテゴリー内の他の動詞が命題補部の使用を発達させていく過程で、さらに動名詞補部が to 不定詞補部に対して優勢さを増すであろう事が予測でき、そのことが現在の用法に繋がっていると考えることが可能である。

カテゴリー2 は、現代英語において目的語として to 不定詞を従えることはできるが動名詞を目的語にすることができない、カテゴリー1 とは反対の動詞である。カテゴリー1 の結果とは異なり、初期近代英語期初頭から既に to 不定詞優位で補部を従えており、この傾向は、それ以降も変わらない。この種の動詞は最初のシフトを相当早い時

期に終え、to 不定詞補部については複合形も相当に発達させていることから、近代英語後期に動名詞補部が発達する時代を迎えても、それをあまり必要としなかった可能性がある。

カテゴリー3 はいわゆる retrospect verbs であり、補部に to 不定詞をとるか動名詞をとるかで意味が明確に異なる。調査を行った殆どの時代で、定形節補部が 9 割近くと圧倒的多数を占めている。動名詞補部は完全に未発達の状態であり、to 不定詞のほうも全体の十数%程度でしかないが、より詳しくみてみると興味深い事象が観察された。forget も remember も頭の中で想念として行われる行為であり、主節の動詞と命題補部の動詞との間に他のカテゴリーよりも微妙な時間差が必要となることが多いのであるが、当時は完了形も発達途上であったため、時制の使用に混乱がみられる。過去形、完了形、過去完了形の使用上の混乱の中で、後に、動名詞が主節の動詞よりも過去を示す手段として選択された可能性が出てきた。try については、「試しに～してみる」という派生的意味の発達を待って、動名詞補部が発達するのではないかという予測が可能であった。

カテゴリー4 は、動名詞も不定詞もどちらも補部として従えることができる動詞である。このカテゴリーの動詞はカテゴリー2 と同じく、初期近代英語の初頭、1500 年ごろから to 不定詞補部が完全に優位に立っている。それも、カテゴリー2 の to 不定詞補部の用例が全体の 6 割前後であるのに対して、カテゴリー4 は 9 割前後とより一層圧倒的である。カテゴリー2 に対してカテゴリー4 はより the first complement shift が早めに終了しているようにみえる、現代英語における動名詞補部に対する両カテゴリーの振る舞いの差はこの部分にその原点を持つのかもしれない。その動名詞補部の方は 17 世紀以降 1710 年までは 6%程度で安定している。また、このカテゴリー4 については、時代を経るにつれて命題補部をとる構造自体が発達していく様子も確認することができ、その発達と共に不定詞補部がその数も構造も発達させていく様子がわかる。

以上のように、カテゴリー毎に異なる発達過程が観察され、現在の用法の差に繋がる可能性を示唆する結果を得ることが出来たが、同時に、後期近代英語を引き続き調査する必要性が最初の予測以上に鮮明なものとなった[6)]。初期近代英語以降の時代にこそ、それまでよりもより大きく詳細な変化がみられるのは明らかであり、後期近代英語の調査なくしてこの類の補文推移の全体像を得ることは不可能である。そこで、今後は更に後期近代英語において、それぞれのカテゴリーがどのように発展し現代の用法をもたらしていくのか、更に研究を続けるつもりである。

注

＊本研究は JSPS 科研費　26580089 の助成を受けたものです。

1)　Rohdenburg は、5 種類の補部の交替現象をそれぞれ次のように説明している。

・the rise of the gerund (both “straight” and prepositional) at the expense of infinitives (and *that* clauses)

・the establishment of linking elements introducing dependent interrogative clauses (as in *advice on how to do it*)

・the expansion of (subject-controlled, future-oriented) infinitive interrogative clauses at the expense of finite *wh*-clauses (e.g. after verbs like *hesitate*)

・changes involving the rivalry between marked and unmarked infinitives (e.g. after the verb *help*)

・the simplification of the relevant control properties resulting amongst other things in the demise or obsolescence of unspecified object deletions with manipulative verbs like *order*.

2) カテゴリー1 は、admit、appreciate、avoid、consider、delay、deny、discuss、enjoy、escape、finish、imagine、keep、mention、mind、miss、postpone、practice、report、resent、resist、risk、quit、stop、suggest、tolerate、understand の 26 動詞を調査した。（このうち、約半分に当たる appreciate、admit、delay、discuss、escape、mention、postpone、quit、report、resent、risk、tolerate の 12 動詞については用例が見られなかった。）

3) カテゴリー2 は、afford、agree、allow、arrange、care、claim、consent、decide、deserve、expect、fail、learn、manage、mean、offer、pretend、promise、refuse、swear、threaten、wait、want の 22 動詞を調査した。（このうち、arrange と manage には用例が見られなかった。）

4) カテゴリー3 は、forget、regret、remember、try の 4 動詞を調査した。(このうち regret には用例が見られなかった。)

5) カテゴリー４は、attempt、bear、begin、bother、cease、choose、commence、continue、decline、dislike、dread、endure、hate、intend、like、love、neglect、omit、plan、prefer、propose、recollect、stand、start の 24 動詞を調査した。(このうち、bother、commerce、dislike、plan、start の 5 動詞には用例が見られなかった。)

6) 調査の結果用例がみられなかった動詞を OED で調べてみると次のような結果となった。

カテゴリー１

admit については、1513 年に属格主語を伴った動名詞の例があり、1697 年および 1849 年には定形節の用例が存在するが、不定詞を補部として従える例はみられなかった。appreciate は動詞の初出自体が 1742 年であり、それ以降も命題補部を従える例はみられなかった。delay の他動詞としての初出は 1512 年であるが、動名詞を従える用例が 1611 年の欽定訳聖書の 1 例、不定詞の例は 1611 年、1799 年、1847 年の計 3 例で定形節の例はみられなかった。欽定訳聖書の用例を除けば残りの 2 つは 19 世紀頃の用例である。discuss については 1555 年に定形節の用例がみられる。escape については 1870 年に受身形の動名詞の用例が 1 例存在するが不定詞や定形節を補部として従える例はみられなかった。mention は定形節の用例が 4 例、1617 年、1714 年、1818 年、1863 年に確認できる。postpone については、他動詞の初出は 16 世紀初頭であるものの命題補部を従える用例は一例もみられない。quit は 1754 年以降 1967 年に至るまで、動名詞の用例ばかり 9 例を確認できたが、不定詞や定形節を補部として従える例はみられなかった。resent は動名詞補部を従える用例はみられず、不定詞の例が 1705 年、定形節の用例が 1655 年、それぞれ 1 例ずつ確認できた。resist については、動名詞補部、定形節補部の例は存在せず、不定詞補部の用例のみ 1539 年に 1 例みられた。risk には命題補部を従える用例はみられない。tolerate については、動名詞補部を従える例が 1586 年に、不定詞補部を従える例が 1585 年にそれぞれ 1 例ずつ存在するが、定形節補部の用例は確認できなかった。

カテゴリー2

arrange は他動詞としての初出例は 1523 年、1860 年に不定詞補部を従えた用例がみられる。manage の初出は 1561 年、不定詞補部の用例が 1715 年、1838 年、1857 年、1879 年に計 4 例確認できた。

カテゴリー3

regret は、他動詞としての初出は 1553 年である。しかしながら、命題補部を従える形の初出は 1721 年の動名詞補部の用例であり、不定詞補部や定形節補部の用例は見られない。

カテゴリー4

bother の用例は OED にもみられず、commence は 1979 年の用例が動名詞補部の初出で、不定詞補部の例はなく、dislike は不定詞補部を伴った例が初出例で、1775 年、動名詞補部が 1873 年、plan は不定詞補部が 1918 年で動名詞が 1782 年、start は不定詞補部の例が 1450 年初出だが、動名詞補部は 1833 年だった。それぞれについて、OED に定型節補部の用例を見つけることは出来なかった。これらの動詞は、start の不定詞を除くと、すべて、18 世紀以降の初出であり、比較的最近になってから、問題の構造を発達させた可能性が高いと考えられる。

以上のように、ほとんどの動詞が近代英語後期に問題の構造を発達させている様子が伺える。

参考文献

Anderson, M.　1983.　"Prenominal Genitive NPs," *The Linguistic Review 3.*　pp. 1 – 24.

Bloomfield, L.　1933.　*Language*, New York: Henry Holt.

Bolinger, Dwight L. 1968. *Aspects of Language*. New York: Harcourt, Brace and World.

Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. 安井稔訳『文法理論の諸相』(1970) 研究社.

Chomsky, N. 1972. "Remarks on Nominalization", in Chomsky(ibid) *Studies on Semantics in Generative Grammar*. 安井稔訳 “名詞化管見” 『生成文法の意味論研究』(1976) 研究社. pp. 3 – 75.

Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris.

Chomsky, N. 1986. *Barriers*, *Linguistic Inquiry Monograph 13*. MIT Press.

Chomsky, N. 1991. "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in Freidin (ed.) *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. MIT Press. pp. 417 – 670.

Chomsky, N. 1992. "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in *MIT Occasional Papers in Linguistics 1*. MIT Press.

Chomsky, N. and H. Lasnik 1991. "Principles and Parameter Theory," ms.

Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program.* MIT Press.

Curme, O. 1933. *Syntax*. Heath / Maruzen.

Fries, C.C. 1952. *The Structure of English*. Prentice Hall Press.

Fujiuchi, Kyoko. 2016a. 「初期近代英語における動詞の命題補部—特に現代英語において不定詞および動名詞の補部をとる動詞についての定量言語学的アプローチ」 『比較文化研究』第 120 号, pp.57-67.

Fujiuchi, Kyoko. 2016b. 「初期近代英語における動詞の命題補部
—特に現代英語において、動名詞補部はとるが不定詞補部はとらない動詞についての定量言語学的アプローチ」 『九州情報大学研究論集』 第 18 巻, pp.63-74.

Greason, H.A., Jr. 1965. *Linguistics and English Grammar.* Rinehart and Winston.

Grimshaw, J. and A. Mester. 1988. "Light Verbs and θ-marking." *Linguistic Inquiry 19. pp. 205 – 232.*

Iyeiri, Yoko. 2010. *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins.

Jackendoff, R. 1977. "X' Syntax: A Study of Phrase Structure," in *Linguistic Inquiry Monograph 2*. Chapter 2, 3, 5, 6, 8. MIT Press. pp. 9 – 220.

Jespersen, O. 1909—1949. *A Modern English Grammar on Historical Principals*. Allen and Unwin.

Jespersen, O. 1924. *Philosophy of Grammar*. Allen and Unwin.

Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. Allen and Unwin.

Johnson, K. 1988. "Clausal Gerund, the ECP and Government." *Linguistic Inquiry 19* . pp. 583 – 608.

Nakajima, H. 1990. "Secondary Predication." *The Linguistic Review 7.* pp. 275 – 309.

Pollock, J.Y. 1989. "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry 20.* pp. 365 – 424.

Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.

Quirk, R. et al. 1973. *A University Grammar of English*. Longman.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Roberts, I. 1988. "Predicative APs." *Linguistic Inquiry 19 pp3 703 - 710*

Rothstein, S.D. 1991. "Binding, C-Command and Predication" *Linguistic Inquiry 22.* pp. 572 – 578.

Rohdenburg, Gunter. 2006. “The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System.” *Syntax, Style and Grammatical Norms: English from 1500—2000* ed. by Christiane Dalton-Puffer, Dieter Kastovsky, Nikolaus Ritt, and Herbert Schendl, 143-166. Bern: Peter Lang.

Rudanko, Juhani. 1989. *Complementation And Case Grammar—A Syntactic and Semantic Study of Selected Patterns of Complementation in Present-Day English.* State University of New York Press.

Stowell, T. 1989. "Subjects, Specifiers, and X-Bar Theory" in Baltin and Knoch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. The University of Chicago Press. pp.232 – 262.

Sweet, H. 1898. *A New English Grammar, Logical and Historical*. Cambridge University Press.

Visser, Frederikus Theodorus. 1963-73. An Historical Syntax of the English Language; 3 Parts in 4 Vols. Leiden: E. J. Brill.

Vosberg, Uwe. 2003b. “Cognitive Complexity and the Establishment of –ing Constructions with Retrospective Verbs in Modern English,” in Jones, Charles/ Dossena, Marina/ Gotti, Maurizio (eds.) *Insights into Late Modern English*. Bern: Lang, 197-220

Williams, E. 1980. "Predication." *Linguistic Inquiry 11*. pp. 203 – 238.

Williams, E. 1983. "Against Small Clauses." *Linguistic Inquiry 14*. pp.287 – 308.